

JCA

Japan Communication Association (JCA) Newsletter 日本コミュニケーション学会ニュースレター

NEWS

123 2020.3

CONTENTS

1. 巻頭言 1	10. 支部ニュース：東北支部16
2. 第50回年次大会 テーマについて 3	支部ニュース：中部支部16
3. 第50回年次大会 会場校案内 5	支部ニュース：関西支部17
4. 2019年度第2回理事会報告 6	支部ニュース：中国四国支部17
5. 第49回年次大会 会計報告10	支部ニュース：九州支部18
6. 年次大会 発表論文・セッション募集11	11. メールアドレス登録のお知らせ19
7. 学会賞の選考12	12. 編集後記19
8. 事務局報告13		
9. 広報局便り14		

巻頭言

「不惑」の戯言

中国四国支部長 脇 忠幸 (福山大学)

冒頭から私事で恐縮だが、昨年「不惑」となり、今年は厄年(本厄?)らしい。もうすぐ任期満了で中国四国支部長ではなくなるし、この一年は息を潜めて暮らそう…と思っている矢先に新型コロナウイルスのニュースである。慌ただしく学生に注意喚起しつつも、手洗いぐらいしかアドバイスが思いつかない。目に見えないウイルスの前では、教員も学生も富める者も貧しき者も関係なく、私たちは平等な立場に置かれている。まさに Beck の「リスク社会」を想起させる事態だ。

だが、ニュースを見ているうちに Beck を疑いたくなってきた。私たちは本当にリスクの前に平等なのか。今回の新型コロナウイルスにしてもそうだが、経済的な差異は享受可能な治療レベルや予防レベルの差異に直結するのではないかと。Beck が念頭に置いていたのは自然災害や放射能だろうから、彼への疑義とするには乱暴かもしれない。しかし、Amazon で核シェルターが売られている(150万円也!)のを見ると、やはり「富める者も貧しき者も関係なく」なのかが疑わしくなる。

こうした不平等≒不公正と関連しているのは、経済的な差異だけではないだろう。生粋の田舎者である私からしてみれば、「地域」という要素、すなわち「どこで生まれ育ったか」「どこに住んでいるのか」ということも大きな関わりをもつように思える。たとえば、わが故郷大分と東京を比べてみれば、通院や学会出張にかかる労力・費用・時間は雲泥の差だ。話題となった外部英語試験も、会場までの労力・費用・時間について議論が尽くされたとは思えない。

何も「平等」を絶対視しているわけではないし、正義論に参入したいわけでもない。ただ、地方の生活や教育の状況を目の当たりにすると、研究者である今の私(たち)に何ができるのか、何をすべきなのか、日々考えてしまう。

地方の状況ということ言えば、学会支部の低調ぶりも気にかかる。理事会で他支部のお話を伺う限り、低調なのは中国四国支部だけではないようだ。2018年のJCA年次大会学術局セッションでは、支部長としての怠惰を棚にあげて、「支部は必要ですか?」と過激なスライドを作った。レスポデントであった高井会長からは「支部にしかできないことがある」旨のご返答をいただいたが、ずいぶん困惑させてしまったに違いない。

その後の支部大会では、こうした「地域」が抱える問題について議論してきた。今にして思えば、先ほど触れた大学共通テストについて、地方の研究者組織として声をあげる必要があったかもしれない。それは、地域格差の問題にとどまらない。報道では記述式だけが論点であるかのように強調されるが、プレテストの内容を見ると国語の変貌ぶりに驚かされる。母語教育がコミュニケーションと無関係なはずもなく、日本コミュニケーション学会がこれを看過してもよいものだろうか。コミュニケーションに関する社会問題をより積極的に取り上げることで、支部に「熱」を生み出せればと願ってやまない。

「熱」が必要なのは年次大会も、だろう。だが一方で、ジャーナルのオープンアクセスが定着すると並行して引用回数（ダウンロード回数）やIFで業績評価されるなら、またFacebookやresearchmap等で研究者ネットワークが構築可能になるなら、年次大会という高い／強い身体性を伴うイベント＝資本としての「地域」を孕んだイベントはどれほどの意味を持ちうるだろうか。突き詰めて考えれば、もはや学会という組織に所属することさえも意味を失いかねない状況にあるのではないか。「支部にしかできないこと」のひとつは、こうした鬼子的なまなざしの提供かもしれない。

退任間近の乱筆乱文を言い訳にして放言が過ぎてしまった。そういえば、1971年の日本太平洋コミュニケーション学会設立から数えると、JCAはそろそろ「50歳」である。50歳は「天命を知る」のだそうだ。JCAの「天命」とは何だろうか。「不惑」になっても惑ってばかりだ。

第50回大会「コミュニケーション学の^{アクト}現在地/^{アクト}現在知」について

副学術局長（年次大会担当） 松本 健太郎

第50回大会は2020年6月6日（土）および7日（日）の両日、立教大学池袋キャンパスで開催される運びです。いま現在、立教大学異文化コミュニケーション学部の師岡淳也先生にご尽力いただき、大会の準備を順調にすすめているところです。すでに8本の研究発表、5本の企画セッションが審査の結果として承認されており、充実した大会プログラムを組むことができそうです。今回は50回目の記念すべき大会ということで、例年以上に多くの来場者をお迎えしたいと思っております。会員の皆様にはぜひ当日、会場までご足労頂きたく存じます。

さて、今回の大会テーマは「コミュニケーション学の^{アクト}現在地/^{アクト}現在知」となっております。本学会では、過去しばらく十数年にわたって、年次大会の大会テーマを「〇〇とコミュニケーション」という構図のなかで設定してきた、という経緯がございます。むろんそれはコミュニケーション学の学際性を勘案したとき、他分野——たとえば社会学、政治学、教育学、文学など——との関係性や重層性を整理する、あるいは、将来的なコラボレーションの可能性を構想するといった目的において一定の成果をあげてきたと評価することができます。しかしその一方で、「〇〇」という要素を前景化するあまり、ややもすると「コミュニケーション」もしくは「コミュニケーション学」そのものを真摯に問い、それを検討しつづける機会を逸してきた側面もあるかもしれません。

以上の現況を鑑みたとき、本学会の創設50周年にあたる重要な節目において、上記のような大会テーマを掲げることには大きな意義があると考えられます。あらゆるものが目まぐるしく変容するリキッドモダンの状況にあって、「コミュニケーション」に関与するテクノロジーや環境も急速に更新されつつあります。また、現代を語る鍵語として「コミュニケーション」が重要性を増しつつある今、JCAが将来的に果たすべき役割はますます増大して然るべきと考えられます。時代の要請に応えるためにも、上記の大会テーマのもとで「コミュニケーション学の現在地/現在知」を確認し、それを学会内で議論したうえで、「コミュニケーション学」のさらなる発展へと結実させていきたいと構想しております。

大会1日目の基調講演では、現代的なコミュニケーションの実相に迫るために、研究者であり起業家でもいらっしゃる丸幸弘氏を基調講演者としてお招きする予定です。丸氏は自身が2002年に設立したリバネスをつうじて、未来のイノベーションに向けて「知識製造業」を掲げ、研究と教育とビジネスを連結する「知識プラットフォーム」を構築されてきました。サイエンスとテクノロジーの先端的な知見をわかりやすく伝えるための「サイエンスブリッジコミュニケーター」という資格を制度化したり、あるいは、2012年には様々な分野の研究者や技術者のネットワークを構築するための「超異分野学会」を設立したりされています。さらにそれ以外の領域でも、人と人をつなぎ、孤独を解消するロボットを開発するオリイ研究所の設立にも関与されています。丸氏が「コミュニケーション」を鍵語に遂行してきた数々のプロジェクトは、学術と社会との、あるいは、研究と教育とビジネスとの接点や関係性を考えるうえで極めて示唆的であり、その後のシンポジウムも含めて、刺激的なお話を伺えるものと確信しております。

また、2日目の午後には、50周年記念事業ということで、「日本のコミュニケーション研究のこれまで・これから」というタイトルでシンポジウムを開催することになっております。こちらの企画は、宮原哲理事（50周年記念担当）に主導していただくかたちで、隣接分野の学会の代表者をまじえて、日本におけるコミュニケーション研究の過去および未来をめぐって、多角的な視座から活発な議論が展開されることになろうかと思っております。ぜひ会員の皆様におかれましても、ともに会場での議論を盛り上げていただければと思っております。

それでは大会当日にお会いしましょう。どうぞよろしくお願ひ申し上げます！

第 50 回年次大会 会場校案内

大会実行委員長 師岡 淳也 (立教大学)

この度、記念すべき第 50 回年次大会を立教大学池袋キャンパスで開催できることを大変嬉しく思います。本学の歴史は、1874 (明治 7) 年に米国聖公会の宣教師であるチャニング・ムーア・ウィリアムズ主教によって設立された立教学校にさかのぼります。米国のリベラル・アーツ・カレッジに倣って創設されたとされる本学は、開学当初、英語演説が奨励され、授業で修辞学も教えられるなど、今で言うところの「コ



ミュニケーション教育」が重視されていました。現在でも、異文化コミュニケーション学科やメディア社会学科でコミュニケーション研究関連科目が体系的に配置されている他、国際経営学科のコア・カリキュラムである「バイリンガル・ビジネスリーダー・プログラム (BBP)」においてもコミュニケーション教育が重要な一角を占めています。さらに、2020 年度からは約 4,500 人の一年次生全員が「英語ディベート」を必修科目として履修することが決まっています。このように、本学のカリキュラムはコミュニケーション研究・教育と深く関わっており、今回の年次大会のテーマである「コミュニケーション学の現在地／現在知」を議論する上で有益な視点を提供できるかもしれません。

また、池袋キャンパスが置かれている豊島区は、人口の約 10 名に一人が外国籍住民であり、その国籍も 100 ヶ国を越えます。近年は特に中国、ベトナム、ネパールなどアジア出身者が増えており、移民コミュニティの形成も進んでいます。そのような中、豊島区は 2019 年の「東アジア文化都市」に選ばれ、日本・中国・韓国における文化芸術の発展を目的とした様々な交流事業を実施しました。こうした華やかな文化交流が脚光を浴びる一方で、言語的・文化的に多様な背景をもつ子どもたちへの教育支援の拡充や就学機会の確保など、多くの課題も抱えています。研究者同士の活発な学術交流はもちろんのこと、空いた時間に本学からほど近い場所にある「池袋チャイナタウン」を探訪するなど、グローバル化・多文化化の進む日本社会の縮図とも言える池袋の現在を体感することも、今回の学会の醍醐味の一つかもしれません。

2019年度 第2回理事会報告

日 時：2019年12月15日(日) 13時～17時30分

会 場：二松學舎大学九段キャンパス 1号館 11階 会議室

2019年12月15日(日)13:00から2019年度第2回理事会が二松學舎大学 九段キャンパスにて開催された。20名の理事(委任状4名を含む)の出席により理事会は成立した。

I. 会長挨拶

年末お忙しい中ありがとうございます。議題も多いですが、できる限り円滑に進めていければと思います。どうぞよろしく願います。また、日々のご尽力ありがとうございます。

II. 報告事項

【1】第49回年次大会

1. 学術局・会場担当(松本)

年次大会はつつがなく開催され、基調講演には獨協大学の山口先生にご登壇いただき、続くシンポジウムも活発な議論が行われた。参加者も多く、学会内にとどまらず、学会以外からもご来場いただいた。

【2】各局および担当理事報告

1. 事務局

(1) 入退会者および会費納入報告(高永、菅家)

・会員全体数(12月11日現在)

356名(一般会員 346名、学生会員9名 準会員1名)

・入退会者確認

新規入退会者の確認が行われた。

(2) 会計報告(松島)

・講師謝礼とアルバイト代の税金と手数料、およびマニュアル謝金・アルバイト代に関する源泉税について報告された。

・銀行口座の閉鎖について

4つあった口座の2つを閉じ、現在2つの口座で運用している旨が報告された。

2. 学術局

(1) 年次大会関連(山口・松本)

i. 第50回大会の大会テーマ、基調講演等について

・大会テーマは「コミュニケーション学の現在地現在知(アクチュアリティ)」。

・2月4日に学術局会議の開催予定、発表について審査を行う。

ii. 学術局セッションについて

・基調講演およびシンポジウムをもとに、コミュニケーション学内の異分野間のコラボレーションの可能性を探る企画を計画中。学術局より登壇者への依頼を行う。

(2) ジャーナル関連 (山口)

i. 48巻1号、2号について

1号は11月30日発行、2号には基調講演と2名分の論文が掲載される予定。

ii. 第49巻第1号の原稿募集について

ニューズレターに掲載されているとおり。

(3) 将来構想 (小西)

- ・ 年次大会の基調講演は他の学会から招いてきたが、今後は以下の観点から、年次大会を盛り上げて行こうと考えている。1) コミュニケーション学・研究の中の整理とアップデートを行っていく。2) 現在起こっているコミュニケーション事象についてコミュニケーション学者はどのようにとらえ、貢献できるのかについて考え、それらの事象をトピックとしてストックしていく。会員増をめざし、年次大会で、学部生、院生の発表の機会をつくることや、各研究会については、年次大会を成果発表の場ととらえ、積極的に活用するとともに、さまざまな企画をご提案いただきたい。
- ・ 高井会長より、理事の先生方に、大会でのパネルや個人発表での積極的な参加のお願いがあった。
- ・ ジャーナルについて、基調講演後のシンポジウムについて論文としてまとめていく計画があることが報告された。
- ・ 支部活動の成果を年次大会の支部セッションなどの形で発表するという流れを活性化していくという提案があった。

3. 広報局

(1) ニューズレター122号の発行と123号の予定

ニューズレター122号(11月号)が発行された。次号は2020年3月初旬発行予定で計画中。

(2) 他学会への年次大会送付について

昨年度は年次大会案内を以下の学会事務局へ送付した。今年度も同様に送付する予定である。送付不要あるいは新たに追加した方がよい学会があれば、お知らせいただきたい。

異文化間教育学会、多文化関係学会、日本マス・コミュニケーション学会、表象文化論学会、国際ビジネスコミュニケーション学会、映画英語教育学会、外国語教育メディア学会、大学英語教育学会、日本ディベート協会、SIETAR JAPAN (異文化コミュニケーション学会)、日本語用論学会、以上。

(3) 第50回年次大会広告、展示ブース募集について

- ・ 2020年1月中旬に広告・展示ブース設置以来文を用意し、前年度同様に、広報局のリストと各理事からの新たな紹介企業にe-mailにて送付する。第49回大会では、広告に4社(ナカニシヤ、ひつじ書房、有斐閣、三修社)、展示に2社(ひつじ書房、三修社)から協力を頂いた。

(4) Web 関連 (石橋)

i. 以下についてHPに掲載した(6月年次大会以降、主な事項のみ抜粋)

7月: 異文化間教育学会年次大会案内、教員公募2件、NHK番組トライアル募集

8月: 電気通信普及財団論文募集

9月: 東北工業大学市民講座

10月: 台風19号お見舞い文、SIETAR JAPAN 年次大会

11月: 学会誌第49巻1号締め切り、第50回年次大会研究発表募集、NL122号

12月: 紀要第48巻1号への投稿

ii. HP改修について

- ・ 2019年11月末の段階で、業者をお願いした、全ての公開準備を整えた。

【3】各支部報告

各支部長より報告が行われた。

【4】各理事からの報告

1. 2024年ICAについて（高井）

宮原理事より2024年にICAが東京で開催される可能性があるという報告があった。JCAとの連携の可能性があるのではないかと。

III. 審議事項**【1】第50回年次大会関係**

1. 学術局・会場担当

2月4日の応募状況をもとに、プログラム・スケジュールを考えていく。時間配分など工夫をしていくという方針が決まった。

【2】各局関係

1. 事務局

(1) 支部大会で発生する源泉徴収税に関わる手続き

報告事項の中で審議済み。

(2) 支部会計について

- i. 支部の支出の方針は基本的に本部に準じ、JCA会員への謝金、懇親会費は支払わない。また、交通費は支部の判断に任せるという方針が決まった。
- ii. 理事会の開催場所について話し合わせ、継続審議となった。
- iii. 予算申請について 上記の話し合いをもとに予算の申請を行うよう依頼があった。
- iv. 研究会の助成金の申請について 支部助成金と同様に会長・副会長の承認で付与可能とすることが決まった。

(3) 2020年度予算案、予算編成：経費増減案

2つの経費削減案が提案され、審議の結果以下の方針が決まった。

- ・ プロシーディングスをオンラインのみとする。当日参加者へは両面印刷したものを配付し、そのための予算を確保する。
- ・ 会費請求と総会はがきを同時に4月下旬に送る。
- ・ 若手（学生会員）をサポートするための方策を立てる。
- ・ チラシ・ポスターは電子データの作成を委託し、会員にオンラインで配布。印刷は必要であれば会員各自で行ってもらう。

(4) マイページの開設について

- i. マイページの運用が新HPの開始と同時に開始されることが承認された。
- ii. 会員への周知と、連動するメーリングリストの運用について広報局と連携をとることが確認された。

(5) Web入会申し込みについて

仕様書の確認・検討がなされ、作業をすすめることが承認された。

2. 学術局

(1) 学会賞関連

書籍の学会賞の募集時期について

ニュースレターの発行予定が2月から3月へと変更になったことに伴い、2月にHPでの募集の告知を行うことが決まった。募集の締め切りは例年通り。

(2) ジャーナル関連

i. 「日本コミュニケーション学会・研究論文集投稿規程」第6条の確認とそれに伴う措置について審議され、投稿規程の変更が以下のように決まった。

旧：「第6条（発行・時期） 1) 原則として年1巻発行し、発行日は毎年5月末とする。」

新：「第6条（発行・時期） 1) 原則として年1巻発行する。」

ii. 継続審議であった第14条の変更については変更しないことになった。

iii. 投稿論文の査読審査基準の変更について、継続審議となった。

3. 広報局

(1) Web 関連

HPの最終版承認と移行時期について

- ・最終版が確認され、新HPへの移行が承認された。
- ・今後、各支部のHPの移行が完了するまで、旧サーバー稼働し、その料金も発生する点が確認された。
- ・今後各支部のHPの移行作業が発生することが確認された。

【3】次回理事会開催日時・会場

日時：3月30日(月)13:00～17:00

場所：関西大学東京センター（東京駅前 サピアタワー9F）

第49回年次大会 会計報告

<収入の部>			<支出の部>	
内容	金額	備考	内容	金額
大会参加費(72名)	278,500		<国際文献社委託関連>	
懇親会参加費	165,000		プロシーディングス作成費(410部)	194,039
弁当代	0		プロシーディングス発送費(海外含)	52,321
広告費(3件)	20,000	1ページ(10,000)x1, 半ページ(5,000)x2	チラシ製作費	67,000
展示費	15,000	2日(10,000)x1, 1日(5,000)x1	事前参加システム稼動準備費	20,000
助成金	50,000	二松學舎大学より	事前参加システム利用料	50,000
学会補助	475,236		オンライン決済接続費	20,000
			参加者リスト作成費	5,000
			参加証兼領収書作成費	22,650
			クレジット・コンビニ利用手数料	12,100
			清算処理費	2,500
			受付備品送料・持込手数料	6,361
			ネームホルダー	6000
			業務管理費(全体の22%)	101,000
			消費税	40,302
			小計1	599,273
			<大会実行委員>	
			講師謝礼	70,000
			懇親会費	162,000
			役員弁当代	30,288
			茶菓代	9,489
			人件費	132,000
			事務用品	686
			通信費	0
			小計2	404,463
合計	1,003,736		合計(小計1+小計2)	1,003,736

備考

会場校の二松學舎大学からは、無償での会場提供と5万円の補助金を受けました。厚くお礼を申し上げます。

学術局からのお知らせ

学会誌に関するお知らせ

2019年11月に『日本コミュニケーション研究』第48巻第1号が無事発行されました。現在は2020年5月末に発行予定となっている第48巻第2号の準備が進められています。また、第49巻第1号の締め切りは1月末に終了しました。こちらは2020年11月末の発行を目指し、目下査読作業の準備が行われています。

今は次巻号への投稿論文を募集しています。締め切りは2020年7月31日です。是非皆様の研究論文をご投稿ください。投稿の際は (1)「論文」、(2)「シノプシス」、(3)「著者情報、並びに原稿作成に用いたOS及びソフトウェアなどの情報」の3つのファイルを、下記のメールアドレス宛に添付ファイルで送付してください。執筆・投稿の詳細は、公式ホームページにある「研究論文集投稿規程」・「学会誌執筆要項」を参照してください。

送付の際、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」にて送付してください。送付先メールアドレスは以下の通りです。

To: journal@を入れる|caj1971.com

CC: ohashiri@を入れる|ouj.ac.jp

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の大橋 (ohashiri@を入れる|ouj.ac.jp) までご連絡ください。可能な限り迅速に対応いたします。

本学会では投稿された研究論文に対し、妥当性、体裁、研究方法（データ収集方法等含む）の適切性・倫理性、分析の緻密性・独創性、そして表現の明確性・厳密性の5点の規準で査読を行っています。今回は三番目の研究方法の適切性・倫理性について説明します。

私が研究方法の基本を学んだアメリカの大学院では、研究内容や調査方法に関する倫理審査が非常に厳密に行われていました。研究計画は勿論、調査方法が協力者にストレスを与えないものであるかどうかや、調査協力者と調査者の間に利益相反がないかなどの点に加えて、アンケート調査の場合は同意書の文言や質問項目も併せて認可される必要があり、一旦認可されたものを変更してはならないとされていました。数年前まではこのような厳密な倫理審査を行っている日本の大学は珍しかったかもしれませんが、最近は徐々に広まっていると聞いています。

『日本コミュニケーション研究』への投稿論文でも、ご所属先の倫理審査機関の承認を得ている場合は、その点を明記して頂きたいと考えています。ご所属先に倫理審査機関がない場合などは、調査協力者に同意を得ていることや、利益相反がない旨を記して頂くことが望ましいと思います。また、その点が明確でない場合は、学術局から著者の方に照会を行ったり、一筆をお願いしたりする場合があります。どうぞご理解・ご協力の程を何卒よろしくお願い申し上げます。

皆様の研究成果のご投稿をお待ち申し上げます。

(副学術局長:ジャーナル担当 大橋 理枝)

学会賞の選考につきまして

例年通り、今年も6月の年次大会時に学会賞を授与すべく、現在選考プロセスが進められています。論文の部は『日本コミュニケーション研究』第48巻第1号及び第2号に掲載されている論文の中から選考されます。書籍の部はウェブサイト上で告知していた通り2月10日で応募が締め切られ、こちらも現在選考プロセスに入っております。詳細は決定後にお知らせいたします。

(学術局長 山口生史)

事務局報告

事務局からのご報告とお願い

1. マイページの利用開始について

昨年12月から「マイページ」（会員情報管理システム）が利用できるようになりました。マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しいHPの右上のバナーからログインできますので、できるだけ早い時期にアクセスしていただいて、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。マイページへのアクセスに必要なIDとパスワードは、年会費の請求書と一緒に送っております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なされた場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局
jcom-post[@を入れる]bunken.co.jp

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会HPにある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

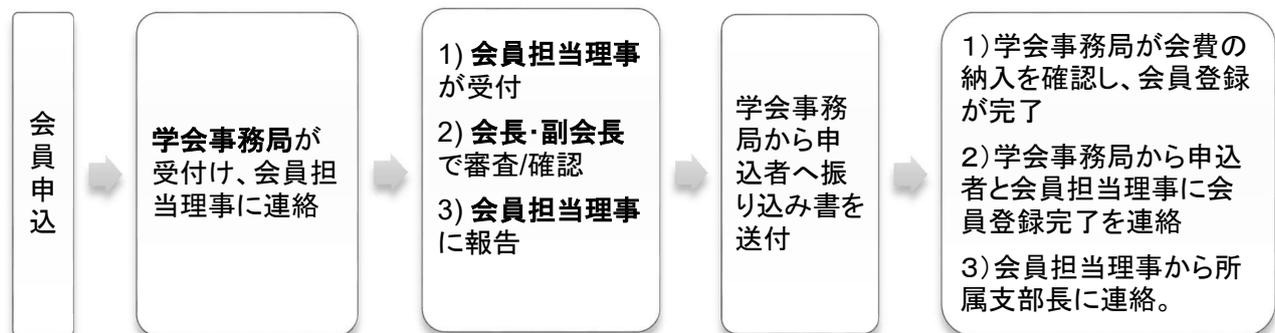
3. ジャーナルバックナンバー、記念図書の購入申込みと閲覧・複写申込み

これまで発行されたジャーナルバックナンバーなど学会発刊物を購入されたい場合は、学会事務局にお問い合わせください。また、科学技術情報発信・流通総合システムJ-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/>)あるいは国立情報学研究所の論文情報ナビゲータCiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>)にも論文が掲載されており、閲覧・印刷することができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せずに複写をご希望の場合は、学会事務局までお問い合わせください。

4. 新規会員の手続き

JCAでは新しい会員を随時受け付けています。次頁のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がございましたら、学会事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願い申し上げます。

皆様のご協力をお願い申し上げます。



広報局便り

広報局からのお知らせ

- ① 現在、全国版の ML の構築を計画しております。JCA ニューズレター今号 11 ページのご案内を参照いただき、マイページへの登録をお願いいたします。
- ② 広報局では他学会の情報や教員公募情報なども積極的にアップロードしていくことにしております。現在も、いくつかの研究学会の年次大会案内や教員公募などの情報をアップロードしています。ぜひ、ご活用ください。
- ③ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。
- ④ ホームページ (<http://www.caj1971.com>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸甚です。

JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：田島慎朗 (tajima-n[@を入れる]kanda.kuis.ac.jp)

① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文で 250～500 字程度の原稿を受け付けております。

② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。和文で 1000～1500 字程度の原稿を受け付けております。

③ 書評

コミュニケーションおよび関連領域の著書に関する書評を受け付けております。和文で 1000～1500 字程度の原稿を受け付けております。

④ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会の NL 表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。(写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。)

支部ニュース

東北支部

(支部長 関 久美子)

2019年11月24日(日)に仙台市にて第20回東北支部研究大会・大学英語教育学会(JACET)東北支部例会をJACET東北支部と合同で開催しました。本支部から2名、JACET東北支部から2名、合計4名が発表を行いました。本支部会員の多くが英語教育にも携わっていることから、昨今の入試改革問題も含めた英語教育の現状なども含め活発なディスカッションが行われました。またコミュニケーション研究とはどのようなものか知っていただくいい機会となりました。次年度もJCA東北支部・JACET東北支部で合同の研究大会・例会を開催する予定であります。

研究発表:

- 「ドラマにおける介護の職業像～介護職はなぜ再生のストーリーに組み込まれるのか～」
五十嵐紀子(新潟医療福祉大学)(JCA会員)
- 「タキノミー・テーブルを用いた学びの視覚化: 教職課程学生の英語発音に対する意識」
川井一枝(宮城大学)(JACET会員)
- 「欧米とアセアンの準 英語圏への留学動機と成果」
小林葉子(岩手大学)(JCA会員)

実践報告:

- 「文字情報からの文章再生と音声情報からの文章再生の比較」
小林英治(山形県立谷地高等学校)(JACET会員)



東北支部定例研究会のご案内

2020年3月14日(日)12時30分より、宮城県名取市の尚絅学院大学地域連携交流プラザにて2019年度東北支部定例研究会を開催します。今回は「コミュニケーションをめぐって」と題し、オンライン型ディスカッションを予定しております。参加をご望まれる方は関 [kseki [@を入れる] n-seriyo.ac.jp] までメールでご連絡ください。プログラムをお送りします。

中部支部

(支部長 森泉 哲)

今年度第2回研究会(支部大会)を以下のように実施します。特に今回の目玉は、久々に会員からの自由発表セッションを設けたこと、またワークショップを多文化学会中継、関西地区研究会と共催させていただき、黒武人先生(武蔵野大学グローバル学部准教授)に修正版グランデッド・セオリーに関する分析方法をご教示いただくことです。貴重な機会ですので、他支部の会員の方を含めて皆さん奮ってご参加ください。なお、参加費無料・予約不要です。会場までのアクセス方法、発表内容については、中部支部ウェブページをご覧ください。

日時: 2020年3月14日(土) 13:25-17:00

会場: 名古屋外国語大学7号館736教室

タイムテーブル:

12:15 運営委員会

次期運営委員決定と2020年度活動方針

13:25 開会のあいさつ(中部支部長)

13:30 自由研究発表(各発表20分、質疑応答10分)

13:30-14:00

1. 中国人留学生の異文化適応過程とアイデンティティ一質的分析を通して一

胡 穎傑(南山大学大学院生)

14:10-14:40

2. 母語は生きる力—カナダのろう者と日本のろう者の比較を通して—

伊藤 泰子 (名古屋学院大学非常勤講師)

(休憩、会場移動)

15:00 ワークショップ (会場: 738 教室)

※本ワークショップは、多文化関係学会中部・関西地区研究会との共催です

「質的データ分析ワークショップ ～M-GTA における談話分析の援用～」

石黒武人 (武蔵野大学グローバル学部准教授)

関西支部

(支部長 守崎 誠一)

2019年11月30日(土)に、関西大学梅田キャンパスにて、2019年度の関西支部大会が開催されました。支部総会の後、宮脇かおり先生(立命館大学)に「アクティブ・ラーニングとしてのディベート: 初学者向け論題作成指導を中心に」をテーマとする講演をおこなっていただきました。講演後の質疑応答では、活発な意見の交換がおこなわれました。

引き続き、森口稔先生(京都外国語大学)の「外国人のための2つの辞書: 『英語で案内する日本の伝統・大衆文化辞典』と日本語学習者向け日日辞典」、小山哲春先生(京都ノートルダム女子大学)の「メッセージ効果対立回避状況でのメッセージ選択戦略: 認知複雑性とコミュニケーションスタイルの影響」という2つの研究発表がおこなわれました。

2020年3月7日(土曜)には、関西支部の春季研究会を関西大学梅田キャンパスで開催する予定となっております。詳細については未定となっておりますが、**COVID-19の影響で中止**と見られ、適宜メールリストや支部ホームページを通じてお知らせいたします。

中国・四国支部

(支部長 脇 忠幸)

中国四国支部では、去る11月23日(土)に福山大学宮地茂記念館(現・福山大学社会連携推進センター)にて第22回支部大会を開催いたしました。前回に引き続き「地域」をテーマの中心に据えました。プログラムの概要は以下の通りです。

学術発表①脇 忠幸(福山大学)

新聞報道における「地域医療」の談話分析

学術発表②Rudolf Reinelt(愛媛大学)

Changes in closing conversations - The example of Japanese standing bars -

Symposium: 「資源」としての地域の可能性—コミュニケーションと地域社会の相互作用」

司会: 脇 忠幸(福山大学)

登壇者: 脇 忠幸(福山大学)/谷口 直隆(広島修道大学)/高永 茂(広島大学)

Symposiumの論点整理&全体ディスカッション

今回のプログラム構成は、前回試みたもの(シンポジウム開催)を引き継ぎました。一方で、学術発表が3件→2件、懇親会なし、といった変更点もありました。参加者は相変わらず少なかったのですが、支部大会ならではの議論を交わすことができた/できるという点からも、シンポジウムのような取り組みは有効だと思います。今後も、支部の現状に見合ったプログラム構成を試行錯誤する必要があるでしょう。

脇の任期満了につき、次回(第23回)は新支部長のもとでの開催となります。新たな体制のもとで支部活動の充実が図られることを願っております。

九州支部

(支部長 吉武 正樹)

2019年11月2日(土)、九州支部第26回支部大会を福岡女学院大学にて開催しました。池田理知子先生が大会実行委員長を務め、福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科の後援という強力なバックアップをいただきました。九州支部大会では過去2回、記憶の継承について議論を深めてきましたが、今回もそのテーマを意識しつつ、新たにメディアに焦点を当てた、「メディア・コミュニケーション～ローカル・メディアの役割～」を大会テーマとしました。大会当日は21名の参加者があり、さらに基調講演では女学院の学生の皆さんが多数参加され、熱気に包まれた大会となりました。

今回も、多様な研究テーマがそろった6本の研究発表に加え、『グローバル社会における異文化コミュニケーション——身近な「異」から考える』(三修社、2019)を用いた授業実践に関するパネル・ディスカッションがあり、理論的にも実践的にも充実したプログラムとなりました。パネルには、編著者の池田理知子先生と埴幸枝先生に加え、著者のお一人である青沼智先生も東京からご参加いただき、活発で密な議論が交わされました。

今大会のメインイベントは、熊本日日新聞社のベテラン記者である高峰武氏による基調講演「井の深さを知る——ローカル・メディアの役割」でした。基調講演に始まり、それに続く林田真心子先生(福岡女学院大学)と池田先生を加えたパネル・ディスカッションにいたるまで、記者として水俣病問題や免田事件などの現場を泥臭く取材してこられた高峰氏の実体験にもとづいた話に、誰もが引き込まれました。記憶の継承にメディアがどう関与しているのか、いや、それ以上に、そもそも「知る」とはどういうことか、知ることと偏見や政治との関係など、コミュニケーションのあらゆる要素が凝縮され、大会テーマの核心に深く切り込む、圧巻の講演および討論でした。研究者である私たちにとってはもちろん、女学院の学生さんにとっても、リアルな「記憶の継承」の場として貴重な機会に

なったことでしょう。

支部大会についてはあまりにも内容が濃すぎて、すべてを書き入れません。詳細については2019年12月発行の九州支部ニュースレター第34号をぜひご覧ください(ホームページ<http://www.caj1971.com/~kyushu/>よりアクセス可能)。支部大会に関する3つの報告の他に、清宮徹先生によるご著書『組織のディスコースとコミュニケーション—組織と経営の新しいアジェンダを求めて—』(同文館出版、2019)の紹介など、盛りだくさんの内容となっています。

最後に、前回のニュースレターでもお伝えしたように、支部紀要『九州コミュニケーション研究』(KYUSHU COMMUNICATION STUDIES)第17号も支部のホームページにアップされております。こちらもご一読ください。



▲発表風景



▲基調講演には多くの学生さんが参加

連絡先

〒162-0801

東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

日本コミュニケーション学会事務局

Fax: 03-5227-8631

[jcom-postf@\[をを入れる\]bunken.co.jp](mailto:jcom-postf@[をを入れる]bunken.co.jp)

<http://caj1971.com>

NL の電子版への完全移行のお知らせと メールアドレス登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

日本コミュニケーション学会ニューズレターは永きにわたり紙媒体でお届けして参りましたが、107号より電子版に完全移行いたしました。当面はPDF版をHPに掲載する予定ですが、将来的には学会全体のメーリングリストを構築してのメールマガジンの配信も視野に入れ、さらに検討を続けていきます。

つきましては、会員の皆様には、本学会HP（学会支援機構データベース）にてメールアドレスの登録をお願い申し上げます（下記の方法をご覧ください。）今後、NLの配信を含めた学会の広報活動を効率化し、会員の皆様とより情報価の高いコミュニケーションを取れますよう、ご協力をお願いいたします。

- ① 本学会 HP (<http://www.caj1971.com>) にアクセス
 - ② 左側メニュー「会員各種手続き (Membership)」をクリック
 - ③ ページ中頃の「各種変更手続き」の下「1.オンラインでWeb登録情報確認・変更、会費残高照会のページ」をクリック
 - ④ 会員番号とパスワードを利用してログインし、メールアドレスを登録（変更）して下さい。
 - * ご登録いただきましたメールアドレスは、学会（学生支援機構）が責任を持って管理し、**学会からのお知らせの配信（および、これに係るメーリングリストの構築）以外の目的では使用しません。**
- 会員番号は、学会からの郵送物の宛名ラベルの中に印字されています（10桁の番号）
 - パスワードをお忘れの場合には、上記④の画面で、「パスワードの問い合わせ」をクリックして手続きを行って下さい。

編集後記

今回の巻頭言は、今年度で中国・四国支部を満了になる脇先生にお書きいただきました。都市部に人口が流れ、大学教員が多忙になり、またJCAのみならず大学教員全体の平均年齢が上がる中、学会活動の意義と必要性を考えるための貴重な提言をしていただいたと思います。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

私も脇先生と同年代の人間として、先生の提言に大いに同意するところです。労力に見合わないものはつぶし、研究会や年次大会（あるいは学会活動全体？）を合同でおこなうことを画策しないと、いろいろなところにガタがくるように思います。

広報局 ニューズレター担当 田島慎朗